

ヘレンとゲーテと賢治のバラ

在岡 孝行

1. ヘレン・トロウベル (Helen Traubal) のバラ

アメリカのメトロポリタンオペラ歌手ヘレン・トロウベル (1899~1972) が来広したのは終戦後被爆の傷痕も生々しい1952年、女史が日本各地を訪問し講演会の催される都市へ、自分の名前が付けられたバラを両国の親善と平和の願いを込め記念植樹された。当時発足まもない広島バラ会も



ヘレン・トロウベル

いろいろ手伝いをされたようである。その後、親株より接ぎ木増殖された苗は市内の公園や会員に数多く配布され、広島を代表するバラとなり、バラブームを作った思い出の品種となった。1968年頃、相生橋電停付近にレストハウスがあり、周辺に多くの株が植栽されていたが、その後ほとんど見かけなくなった。1976年植物公園開園当初、現在の系統進化園の斜面で園芸指導所の名残りと思われる老木株を発見し、増殖した株を植栽している。本品種は1951年名花シャーロットアームストロングを父親にアメリカの育種家スイムが作出した品種で、特徴のある長蕾から明るいサーモンピンクに弁底黄色で、花弁数25枚くらいの丸弁高芯咲き、花径20cmくらいで微香がある。耐病性が非常にあり、強健で2m位生育する。資料館横のバラ園に植栽している。

2. ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe) のバラ

1995年6月ドイツを訪れた私たちはツアイブ

リッケンのオイローパバラ園で満開のバラとローズフェストを堪能した後、欧州の保養地バーデンバーデンで試作場を見学し休息した。24日ドイツウヒの森を抜けシュワルツバルドバラ会会長、ヴォルフガング・ベルガー氏の待つフロイデン・シュタットを訪れた。この街は終戦直前にフランス軍により空襲され、破壊された教会などが数多く残されている。その後、歓喜の街となづけられ多くのバラが植えられている。フロイデン・シュタットは海拔700mもあり曇天の日が多く、冬場はかなり低温となりバラ栽培には厳しい地方で、ほとんど開花していなかった。ベルガー氏は文学博士で、郊外にあるホーヘンリードホテルのオーナーである。自宅のバラとホテルの広大なバラ園を見学した。ホテルの一角にゲーテのバラとなづけられたコーナがあり、3株のオールドローズが育成中であつた。それはワイマールにあるゲーテの旧宅に植えてあつたバラを、ベルガー氏が穂木を持ち帰り増殖したものだと説明された。全国都市緑化フェアの会場として牛田総合公園にバラ園が建設中であり、3種の穂木をお願いしていただいた。8日間の旅行後、佐伯町の広島バラ園温室で芽接ぎされ、運よく活着し増殖され、翌年春、苗木を植物公園で鉢栽培し始めた。1997年5月訪独の折りお世話になつたベルガー氏ら10数人が来日し、5月23日に来園され、育成中のゲーテのバラの名前がアルバ系のアメリカ、アルバ系のインカルナータ、ケンティフオーリア系のラ・ノブレスだと知ることができた。3種の特徴を記録しておく。

Amelia (アルバ系)

1823年以前より栽培される。花色はうすいピンクで八重咲き、微香あり。この系統の特徴である青灰色の葉、樹勢強健で、栽培しやすい。日本ではあまり栽培されていないようである。

Incarnata (アルバ系)

正式名 Great Malden's Blush と呼ばれオールドローズの代表的品種。1738年以前より栽培されている。花色は白色に薄いピンクが混じる透明感のあるソフトな花弁で、よく栽培されるメイドンズ・フラッシュより花形が一回り大

きいとされる。気候によりピンクが濃く発色することがあり、妖精のキス (Cuisse de Nympe) と呼ばれてアルバの名花とされる。樹勢強健で、栽培しやすいが花卉が雨に弱い。



メイドンズ・ブラッシュ

La Noblesse (ケンティフォリア系)

1856年作出。花色は明るい濃いピンクでこの系統の特徴である花卉数はさほど多くなく、雨にも強い。樹勢も強健で1.5m位の樹高となり栽培しやすい。ケンティフォリア系としてはやや異質な品種。当園では以前イギリスより導入していたが、日本ではあまり栽培を見かけない。

ゲーテは詩人、劇作家として古典派の代表とされるが、バラ愛好者にとっては、近藤朔風の訳、野ばらの作詞としてよく知られている。野ばらの曲は、シューベルトやヴェルナーが日本ではよく歌われるが、ドイツ文学者坂西八郎によると、ベートーベンやブラームスなど88曲の楽譜が知られ、なんと121曲以上あるといわれている。ドイツ各地でロサ・エグランテリア (Sweet Brier) やロサ・カニナ (Dog Rose) などいくつかの野生バラをみかけたが、案外ゲーテは自宅庭のオールドローズをみて、野ばらの詩を書いたのかも知れない。

3. 宮沢賢治のバラ

岩手県花巻市生まれの宮沢賢治(1896~1932)は、詩人、童話作家として有名であるが、農芸化学者、農業指導者としても数多くの功績をの

こしている。豪農であつた生家に植えられていたバラが賢治のバラとして残されている。当地には400種、5,000株のバラを植栽した花巻温泉バラ園があり、賢治のバラも日光とラベルづけされ植栽されている。1936年発行の帝国ばら協会誌によると、日光とは正式名グリユス・アン・テブリッツ (Gruss an Teplitz) と呼ばれる、ブルボン系のオールドローズである。1897年ドイツの Geacwind 作出で、花色は濃赤色の丸弁抱え咲きの美花で、弁数は30枚程度、非常に良



グリユス・アン・テブリッツ

い香りがある。枝や新葉が赤みを帯び、樹勢、耐病性はあまり強くない。ブルボン系の特徴である花首が弱く、下垂して開花する。栽培はやや難しいと思われる。最近ではあまり見かけない品種。この品種は平成10年3月、日本バラ会中国支部会員である、山口県熊毛町の中村桂子氏が花巻温泉バラ園より導入された新苗を寄贈していただき、鉢植えで展示している。

今回原稿を執筆にあたり、資料提供の広島バラ会会長、田頭数蔵氏、助言いただいた栽培課井内課長にお礼申し上げます。

〈参考資料〉

ガーデンライフ 1972 No 6 誠文堂新交社
Modern Roses vol.10 アメリカバラ協会
複製帝国ばら協会誌 オールドローズとつるバラクラブ
人はなぜ薔薇を愛するのか 熊井明子 ベネッセ